

茂原市史編さん 事業の活動

(原始・古代調査その二)

「上茂原遊水地造成現場で
確認された沼の跡(黒い
泥炭層)」

市史の編さんというとか何かも専門的な仕事のように思えるかもしれないが、そうではない。確かに古い時代ほど意味のわからない用語が並ぶので敬遠する人も多いだろう。しかしそれは、わからない世界を手探りで研究してきた結果でもある。いわば研究の軌跡を示しているのである。

現在の私たちは様々な問題を抱えている。都市化ひとつとってもかたちこそ変われ昔からあった。当地茂原でも集落の増加は古墳時代の初めに顕著となった。それは弥生時代の限定的な広がりをはるかに凌ぐものである。それを支えたものは何か。農業技術や用具の進歩もあったが、最も大きな要因は地域的な政治構造の再編(要するにムラからクニへといった)にあったか

と思われる。そこには関東の西や北から人々の移動や移住を伴う技術や文化の伝播もあった。国府関遺跡の出土遺物はそのことを如実に示している。では、その後開発が進展したかといえそうではない。結論からいうとその原因

は当地の地形・地質条件が関わっているのだが、大きな古墳が作られなかった要因の一つであろう。以後は、緩やかな歩みながら古墳時代後期になると市域西部の丘陵地帯(とりわけ小林、長谷、国府関、真名付近)には通称「やぐら」と呼ばれる横穴墓が沢山作られるようになる。この横穴墓は当初昔の人の住居ではないかとされたが、現在では遺骸を収めた墓の一形態であるこ

とがわかつている。墓を造りそれを維持することは当然開発と連動する。鉄製農具は奈良時代以降に出土例が多くなるが、横穴は鉄製工具で掘られている。同じ理屈で谷間の開発も進展したのではなからうか。

しかしそのことは同時に植生の破壊も意味した。藻原庄比定地候補の一つである藻原寺前の広い水田地帯の一角では遊水地の造成に伴い地層断面が露出したが、約一メートル程の泥炭層の上に腐植土をあまり含まないシルト質の明褐色土が厚く堆積する。

泥炭層は縄文時代の沼の跡であり、その後は一宮川上流から土砂の供給が強まり急速に沼が埋められたのであろう。その最上部が現在の耕作土となる。とはいえ、一昔前の絵図や地形図、空中写真でみると、普段でも湿田であったり、増水時には沼のような場所と思われる所も多く確認される。一方、川の影響が少ない本納(小林地先の低地では、その中央に一昔前まで沼地が残っていたことは近代郷土誌の記述と一致する。

昔の川は蛇行し所々に沼をつくり、川筋も一定しない。それでもそういう「あそび」があつて自然は機能した。人々は溢水する所には住まず、収穫もそれほど期待しなければ事足りたのである。しかしながら、それが近代になり河



▲上茂原遊水地土層断面の泥炭層
(縄文時代後期～晩期)

▲上茂原遊水地土層断面

茂原市史編さん委員

小高 春雄

問合せ

美術館・郷土資料館

☎(26)2131 FAX(26)2132